

5月号の主な記事：ユース・アメリカ・グランプリ

バレエを学ぶ青少年のための世界最大のコンクールである、ユース・アメリカ・グランプリ (YAGP)。12回目となる今年のニューヨーク決選について、編集長エマ・マニングがレポートします。

3月21日、スカーボール・センターでの予備ラウンドに続いて、ニューヨーク・シティ・センターで決選がスタートした。今回もとても注目されたのは、多くの日本人の参加をみられたことだろう。直前に祖国を襲った最悪の自然災害を思うと、それぞれが悲しみを抑えて磨き抜かれた演技を見せたのは、驚くべきことだ。まずジュニア女子では前田紗江、翠川栞、金原 里奈が年齢の水準を超えた技術を示したが、そのプロ意識には頭の下がる思いだ。

とはいえ、残念ながらジュニアの中には、派手な技巧を追求するあまり残念な出来ばえに終わる参加者も見られた。あるアメリカ人少女は『ラ・バヤデール』の出だしで片脚を天にも届けと蹴りあげたために転倒しかけたが、力づくの踊りの例はこれだけに留まらない。垂直なエクステンションも、握りこぶしにでたらめな腕では価値がない。回転の数だけを追求するのも同様に無益だが、タイラー・ドナテリに限っては、ビルエットはストレスと全く無縁だった。『ラ・バヤデール』の最初のダイアゴナルで四回転を次々と、軽やかに決めて銅賞を受賞。銀賞は気迫に満ちた『エスメラルダ』のパウラ・アルバス、そして金賞は勢いのあるマネージュを見せたハナ・ベッツが獲得した。

シニア女子でも、三人の日本人が目を惹いた。渡辺与布(あたう)、金賞を受賞した田代梢はそれぞれ『パキータ』を美しく踊り、土田明日香は『エスメラルダ』で技術的な難所を正確にこなしただけでなく、典型的なスプレットとされるこの役で感情的な深みを表現した。本誌主催の芸術賞を受賞した彼女には、この先すばらしいキャリアが約束されているに違いない。

そして赤い衣装が目にも鮮やかなアメリカのハナ・クーラスが『ラ・バヤデール』を涼やかに踊って銀賞、堂々たる『ドン・キホーテ』の韓国のミン・ジュン・キムが銅賞を手にした。シニアではグランプリも女子から出たが、ブラジルのマヤラ・マグリ・V・ダ・グラカの黒鳥のヴァリエーションはお手本のようなだった。他に北京舞蹈学校のヤリ・スンは繊細なオーロラでパレリーナとしての潜在的な力を示し、キューバのガブリエラ・メサ・オチョアの黒鳥の大胆さ(やや手に表情をつけすぎだったが)も目を惹い

た。そして決勝進出には至らなかったものの、洗練された『エスメラルダ』のクララ・ソウリー、優雅な『ジゼル』を踊ったアナスタシア・バーティンショー、ジュテで軽やかに開脚した衛藤ひなのの三人も印象に残った。

ジュニア男子というのは、なんとも愛らしい小さな男の子が揃い、私たちの冷静な批判能力が試されるカテゴリーである。実際には十二歳でも、八歳と言っても通用しそうな参加者もいる。そんな少年たちが男性的な高等技術を悠々と決めるのだから、つい表情も緩もうというものだ。中でも私が心を惹かれたのは端正な『ラ・フィユ・マル・ガルデ』の森川礼央だが、審査員が金賞に選んだのはイタリアのジャコモ・レベロ。そして銀賞はアメリカのブレイク・ケスラー、銅賞がスイスのジュゼッペ・パウシリオ。三人とも、前途有望な少年だ。そしてジュニアのグランプリは、驚くほど安定した技術を持つイタリアのアラン・ベルが獲得した。

シニア男子は、二人のキューバ人がしのぎを削った。キューバ人がヴィザを発給されてYAGPに出場するのは長年なかったことで、まずは彼らと前述のオチョアがニューヨークの舞台に立てたことを、喜びたい。ピクトル・マヌエル・エステベス・アコスタとミゲル・エドゥアルド・アナヤ・ロドリゲスは、いずれも見事な演技だったが踊りからは喜びが感じられず、観客の喝采を得ようとして大きな失敗をしてしまった。おそらく、スターのように振る舞えと指導されているのだろうが、そんなものは若い彼らのためにならない。

代わりに賞を得たのは、エレガントな『眠れる森の美女』で金賞を射止めた韓国のスン・ウー・ハン、銀賞はしなやかな『海賊』の日本の富士宙夢、そしてワシントンで学ぶジュンジョン(ジェイク)・ツァオは、舞い上がるような跳躍のジークフリートで銅賞を手中にした。北京のゴン・イ・ウェンの躍動感あふれるジェイムズと、長い手脚を活かして『エスメラルダ』の男性ヴァリエーションを優雅に踊ったルーマニアのテューダー=ポール・モルドヴェアヌーの名前も記しておきたい。(翻訳:長野由紀)

写真は上から、富士宙夢、衛藤ひなの、田代梢

Photos: E. Kauldhar/Dance Europe

